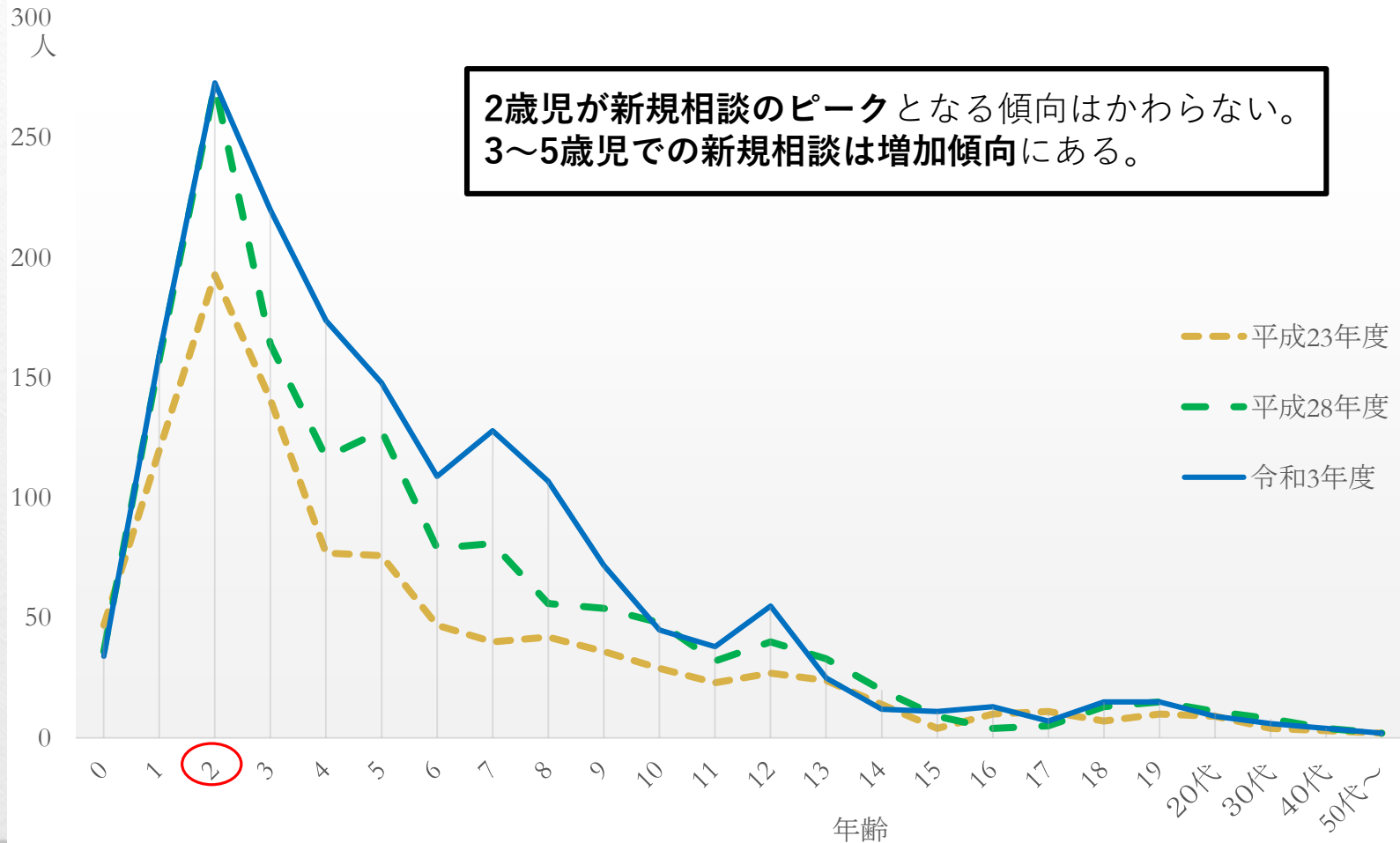


# 幼児期の家族支援

---

いろいろな所属の子どもたちに必要な支援とは？

# 新規（初回）相談件数の年齢別推移



※20代～50代の各年代の数値は、各年齢の平均値。

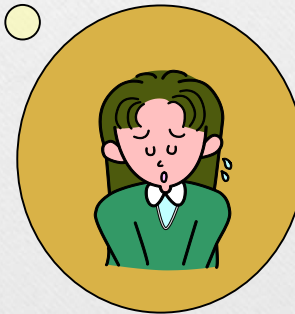
# 初回相談後の保護者を支える 初期療育グループ

どう育てていったらいいの？  
(育児の仕方)

こどもの発達の遅れは個人差？  
それとも障害？  
育て方が悪かったの？  
(こどもの捉え)

不安・ショック  
自責・怒り  
戸惑い  
(感情)

保護者支援には  
上記の問いに  
対応できる  
「仕掛け」が必要



- 同じ悩みを抱える保護者同士の出会いの場(ピアカウンセリング)
- 先輩保護者との出会いの場(メンタリング)“ペアレントメンター”
- 子育ての仕方を一緒に考える場
- 必要な知識や情報をタイミングよく提供する機会

# 初期療育グループ

## ○保護者の子育てを支える

保護者を孤立させず、子育てへの自信の回復を目指す

子どもの発達の特性を知る

適切な対応を知る

## ○仲間との出会いの場

同じ悩みを持つ保護者同士の出会い

他の母の話を聞く ⇒ 自分だけではない

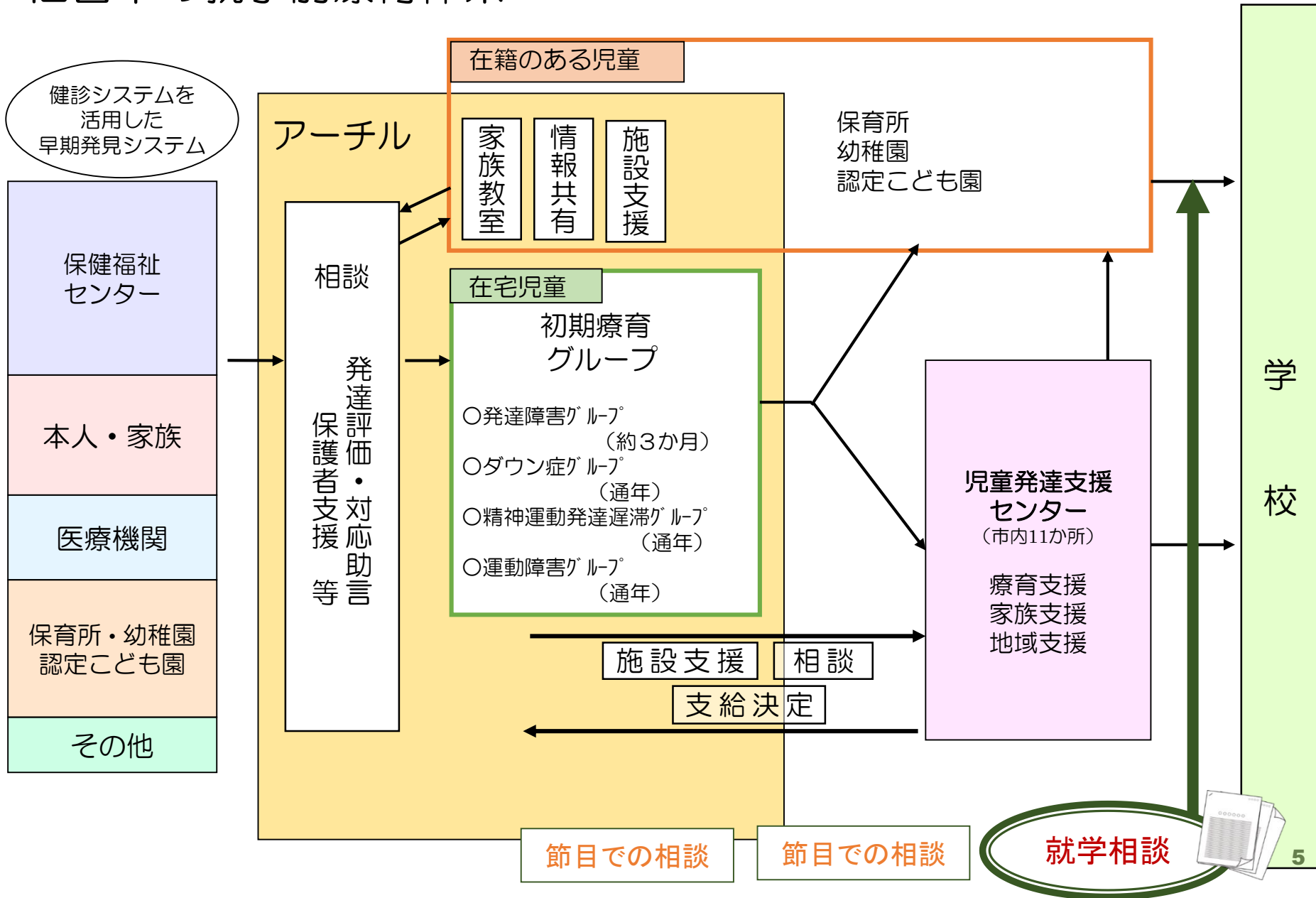
自分の気持ちを話す ⇒ 気持ちを整理できる

## ○先輩保護者との出会いの場

将来への不安が大きい

⇒話を聞くことで安心できる。一步を踏み出す力になる

# 仙台市の就学前療育体系



# 「家族教室」

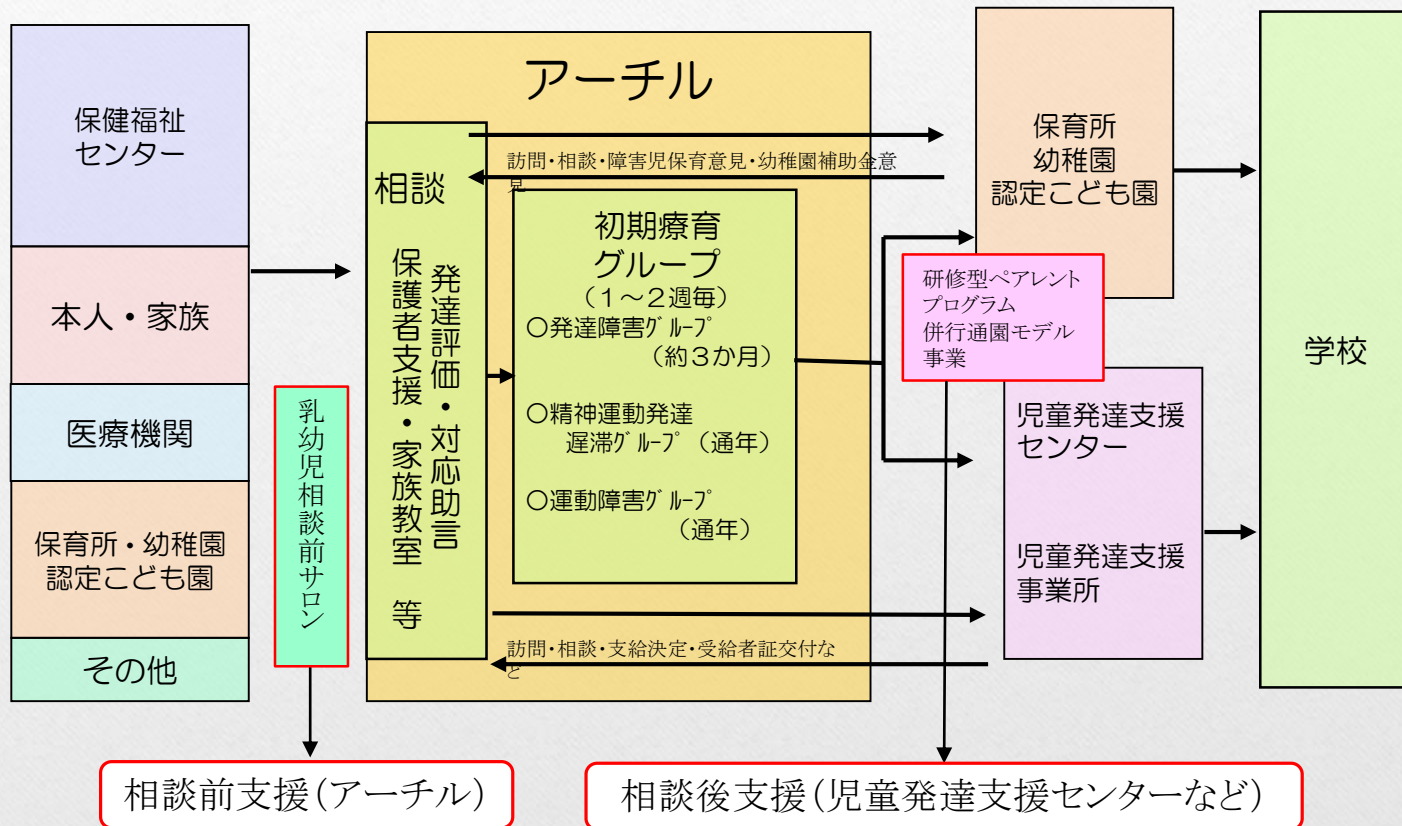
- 初回相談時、すでに幼稚園・保育所（園）に在籍している児の保護者に対し開催
- グループワーク形式で行い、保護者同士の出会いの場、発達障害についての学びの場になっている。
- 特性に合わせた対応についての学びの機会
- 就学準備について教員からの話
- 先輩お母さんの話

一人で思いつめていたが、  
他の母の意見を聞いて気持ち  
が楽になり、視野が広がった。

子どもの対応について  
前向きになれ、自信  
がついた。

# 仙台市の就学前療育支援体制

支援の空白の時間が生まれないように



# 様々な家庭状況 様々なニーズに対応する重層的支援

- 保護者が仕事をしている。復職希望している。  
⇒ 特別支援保育申請
- 保護者が在宅だが、育児に手がかけられない  
保護者自身の体調の問題  
在宅介護がある  
⇒ 幼稚園の延長保育、児童発達支援事業所による放課後支援
- 保護者が在宅だが、交通機関を使うのは難しい  
自家用車がない  
児が多動、感覚過敏など  
⇒ 送迎がある母子通所  
自宅から近い子育て支援施設  
訪問型支援

支援のはざまに保護者が  
おいていかれないよう、保  
護者のニーズに合わせて  
コーディネートしていく



# 子育て支援と障害児支援の連携

障害児支援

子育て支援

療育



児童発達支援事業所

連携

のびすく

子育て支援  
センター  
子育てネットワーク

子育て

幼稚園

保育所

児童館

療育  
地域支援

連携

連携

バックアップ

バックアップ

児童発達支援センター  
(11カ所)

連携

区家庭健康課

連携

連携  
(精検等)

見立て  
方針

アーチル

連携

子育て支援課  
運営支援課

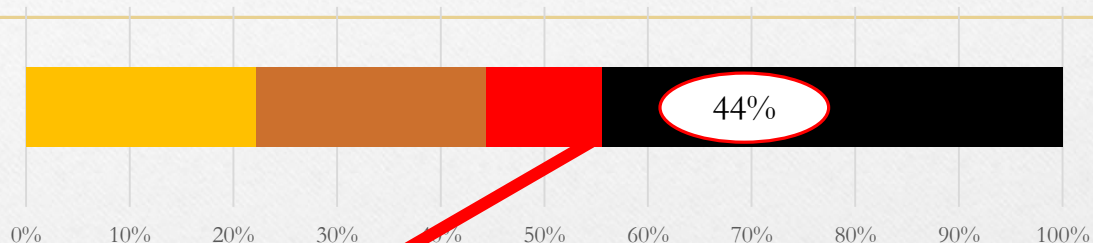
# 育児支援とペアレントトレーニング

---

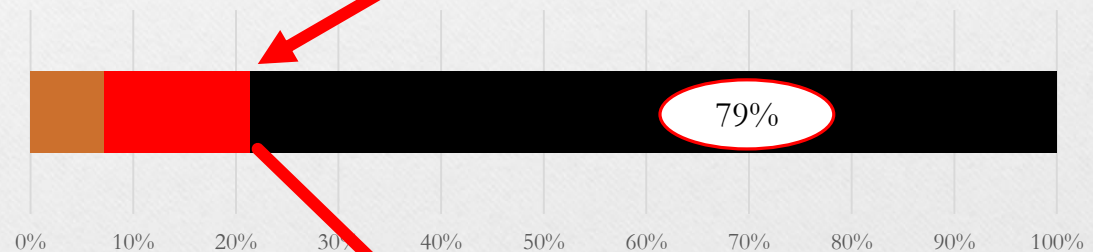
気づかないうちにマルチリートメントに  
子育ての知恵の不足  
生活の夜型化  
急速なIT普及

# コロナ禍の子どもたちの家庭生活への影響 メディア時間の変化 小学6年

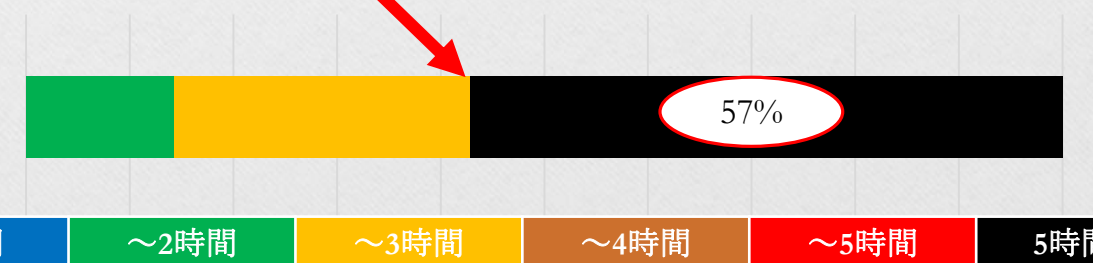
2019年度  
(R1年度)



2020年度  
(R2年度)



2021年度  
(R3年度)



なし

~1時間

~2時間

~3時間

~4時間

~5時間

5時間以上

# コロナに対応した生活の中で 子どもたちに生じてきている変化

- “おうち時間”の増加(コロナ休校、習い事の休止、放課後DSの利用控え、外出控え)により、メディア時間は明らかに増加し、その影響は継続、定着しつつある。
- 睡眠習慣、メディア管理ともに、もともと環境要因の脆弱な子どもたちがコロナ禍の影響を強く受けている。



- 低年齢からのメディアの長時間視聴による、様々な経験不足の影響の深刻化の懸念  
⇒対人コミュニケーションの発達、視知覚の発達、運動機能の発達の遅れ
- 不登校児の増加の懸念



- コロナの影響が長引く中、睡眠時間の確保と**遊びの多様性**を保つような支援が必要
- 入学後、1-3年へと学年が進むにつれ生活習慣の崩れが顕著になる傾向がみられており、この時期の悪化を防ぐことが重要。幼児期からのかかわりが必要。

# 子育て支援ニーズの高まり 子育ての知恵が引き継がれていない

- 核家族化:ふつうの子育ての知恵が継承されない。  
ほかの人の子育てを目にすることがない
- 少子化:家庭という社会の消失。王子様、お姫様化。
- 共働き:生活の夜型化
- 出産年齢の高年齢化:  
発達障害の増加、  
収入は高いが体力が厳しい  
同胞がいないケースが多い  
サポーターとなっていた祖父母の高齢化、介護と育児が同時期に重なる
- メディアの発展:  
メディア子守、ゲーム依存症の増加、  
不器用なこどもたち

# 子育ての知恵

- 一次反抗期・・・ペアレントトレーニングの対応
- ギャングエイジ・・・直接的な介入はしない
- 二次反抗期・・・目標は自律。目は離さず手を離す。
- 世代間境界をつくる・・・母子密着して子の召使にならないように

小学校高学年には支援方針の変更

“失敗させない支援”から“失敗を保障する支援”へ



それまでに、自分のことは自分でできるスキルを身に着けさせておく。

“支援を減らす方向性”を明確に

# ペアレントプログラム ペアレントトレーニング

---

- いずれも手法であって、目的ではないことに注意。おとなしくゲームをしていることをほめれば、ゲームを長時間する子が出来上がる。
- 子育ての方向が正しい方向に向かっているかについての“子育て支援”とペアであることが大切
- いずれも保護者のメンタルヘルスを向上させることが報告されている

# ペアレントトレーニングでは 子どもの行動を3つに分ける

- 増やしたい行動……………ほめる
- 減らしたい行動……………注目を与えない(行動を無視する)  
相手をしない
- 絶対に許せない行動………すぐに止める

すぐに指導したくなるが、  
行動を変えてくる  
まで待つ

望ましい行動に変えてきたところを逃さずほめることで  
“肯定的な注目の浴び方”を教える



# 減らしたい行動、 増やしたい行動の見極め

～状況により変わっていく～

- 中学生へのペアレントトレーニングでは  
行動を3つに分ける基準が、母の基準と異なることが多い  
自律によいこと → 増やしたい行動  
「小遣いは自分のものだから自由につかっていいで  
しょ。」

親がかかわりすぎて、自律を妨げると引きこもりの  
リスクが・・・

# ペアレントトレーニング

---

- 望ましい行動、減らしたい行動、絶対許せない行動の分類が大切であり、子どもの状態によりその分類は変わってくる。スモールステップの目標。
- 集団指導の場でも有効であり、教師等の支援者のメンタルヘルスを向上させる
- ASD(自閉スペクトラム症)児とADHD児では減らしたい行動への対応が異なる。ADHD児は行動を無視して待っていれば正しい行動に変えてくることができるが、ASD児は正しい行動を提示しないと変えられない。

# 家族を支える

- 家族の状況に合わせた、今できるところからの支援で、育児への自信を取り戻せるようにしていく
- 自律に向けての方向性の確認をしながら進めていく
- 社会環境の変化により、気づかないうちにマルトリートメントになってしまっているケースが増加。

## 子育て支援機関との連携

- 様々なニーズに対応するには複数の支援機関の連携が不可欠であり、支援方針を共有し、それぞれの役割を果たしていくことが必要